

## 平成 30 年度 環境科学院 修士論文内容の要旨

### 市立札幌大通高校における渡日帰国生徒に対する学習支援について

北海道大学大学院環境科学院  
環境起学専攻 実践環境科学コース  
許丹

最近、日本で暮らす外国籍の人々が増加している。彼らの子どもの対応も、多文化共生社会として進めなければならない。「児童の権利に関する条約」により、外国籍の子どもは、日本人の子どもと同等の権利を有する。そのため、義務教育の小中学校は卒業できる。しかし、渡日帰国生徒の高校進学率は約 50% (全ての高校進学率約 98%)(田中, 2017)。大通高校は北海道では唯一の渡日帰国生徒を受け入れる高校である。大通高校は 2008 年に新設され、三部制(午前部・午後部・夜間部)、単位制、普通科の高等学校である。これまで、市立札幌大通高校を対象にして、渡日帰国生徒を受入体制できた経緯(伊藤, 2009)、学校外の日本語支援団体との関係(杉山, 2012)、日本語授業を中心とした日本語学習や支援について(山下, 2012)等が議論されている。

本研究の目的は、聞き取り調査をとおして、先行研究の結果を確認し、大通高校の学習支援について、渡日帰国生徒はどのように受け止めているか、また、大通高校から依頼されて実施した中国語の母語支援授業の役割について明らかにすることである。

聞き取り調査や WECHAT、LINE でのやりとりを、2018 年 5 月から 7 人に対して、計 25 時間行った。日本語を学ぶ授業や彼らに配慮した授業、一般の授業の補習やテスト時の配慮、母語支援などが、彼らの「自由な高校生活」を支えている。そのもとで、彼らは、自分の興味にあった授業も選択し、自分のペースで学んでいる。また、渡日帰国生徒を含めて多様な背景を持つ生徒同士がお互いを受け入れる環境となっており、生徒自身を「特別な存在をされていない」と表現している。その一方、卒業後について不安をもち、それに対応した学習も行っている。

中国語の母語支援授業は、中国の高校教材を用いた古典文章や、時事ニュースの議論や作文、さらに中国の高校で学びとともに大学入試で用いられる作文形式(議論文・記叙文)を内容として、2018 年 5 月から 1 時間授業を計 12 回行った。母語支援授業の役割として、心のケアだけでなく、「第2言語習得や論理的思考の発達」として、彼らが中国を離れた時点まで学んだ作文能力を活かし、議論文・記叙文を理解することができるという強みを生み出せることを示した。彼らは議論文と記叙文が混在した文章を書いていることを指摘し、日本とは異なる作文形式があることや、日本の文章の特性について気がつかせた。日本語と中国語を使える彼らが、将来出会う中国語を話す人々と交流する際に、相手の論理思考を理解してコミュニケーションできる効果も期待される。